

スタイル & アイデア：作曲考

# 第1回作品演奏会

# 縦と横

2022年12月24日（土）

トーキョーコンサーツ・ラボ

13:30 開場 | 14:00 開演

## ｜スタイル&アイデア：作曲考について

映像・音声を配信する様々な媒体が賑わう今日、ある作品の演奏記録にアクセスすることは以前に比べて遥かに容易になりました。それに対して、作品創造のプロセスを支えている、作曲家の「スタイル」や「アイデア」について詳しく知る機会は、それほど多くありません。作品の音に触れることはできても、その背後にある創作観や、それが生まれるプロセスに触れる機会は限られているのです。

そこで、私たちは作曲家たちの創造行為に触れるためのプラットフォーム作りを目指して2021年8月に「スタイル&アイデア：作曲考」を立ち上げました。メンバーは演奏者、音楽マネジメント従事者、音楽学者によって構成され、これまでに同時代を生きる作曲家の樋口鉄平、灰街令、桑原ゆう、辻田絢菜各氏の論考、インタビュー、プログラムノート等、主に文字ベースで作曲家の考えに触れることのできるものを当団体のWebサイト上で公開してきました。

本日は、灰街令氏による新曲、樋口鉄平氏が主催した「第一回米田恵子国際作曲コンクール」に出品された二作品、そして桑原ゆう氏、辻田絢菜氏による委嘱新曲をお届けします。また終演後には、当団体が桑原、辻田両氏と取り組んできた今年度のプロジェクトの成果を踏まえ、作曲行為やその協働性をめぐるシンポジウムを開催します。

私たちの取り組みが、現代の音楽について考える空間をもたらし、未来の音楽創造の種となれば幸いです。

スタイル&アイデア：作曲考 小島広之、坂本光太、西村聡美、原 壘、八木友花里



## | Program

### 灰街 令

《De-S/N\_T/S——ピアノとモジュラーシンセサイザーのための》(新作初演)

演奏 | 灰街 令

### 山崎 燈里

《黒い帯》

演奏 | 坂本光太、八木友花里、山崎 燈里 (スコア)

### Camille Kiku Belair

《Book Piece》

演奏 | 小島広之、坂本光太、西村聡美、原 壘、八木友花里

### 桑原 ゆう

《落下する時間<sup>とき</sup>》(委嘱初演)

演奏 | 八木友花里

### 辻田 絢菜

《メタルチューブワーム》(委嘱初演)

演奏 | 坂本光太

———休憩———

### シンポジウム (日本音楽学会 支部横断企画)

題目 | 原 壘「作曲行為をめぐるドキュメンテーションの(不)可能性」

共同討議 | 桑原ゆう、辻田絢菜、小島広之、坂本光太、西村聡美、原 壘、八木友花里

## Program Note

### 灰街 令《De-S/N\_T/S——ピアノとモジュラーシンセサイザーのための》(2022)

Deは接頭辞であり、S/NはSign/Noise、T/MはTime/Spaceを主として表している。

ピアノとシンセサイザーの実演の背後では、事前に録音された同編成による演奏が再生される。実演と再生の音楽は聴覚上の判別を無効化するように似寄りつつ、音響スペクトルにおいて微妙な差異が与えられている。

現在——それはどれ程の幅を持つ時間だろうか——演奏される再演と、再演のために初演され編集された過去の再生が、意図のないノイズのような、音楽未満の独り言とその影として空間に響く。

意図のサイレンスという名のノイズの充溢の中で、増幅されることなく二重化されることで省察される一音は、どのような signification を引き起こし、次の瞬間の一音という未来の単位への予期と共に音楽へと構造化されるか。

鳴り響く音楽は常に過去に由来してきた。それは音楽内的記憶に根ざした変奏として認知されることもあれば、より広く過去の音楽的記憶に対する認知的参照として現象することもある。ある音を知覚するためには空気の周期的振動という記憶未満の記憶を必要とする。

知覚に先立つ記憶たち。揺れ動く過去の星座。

### 山崎燈里《黒い帯》(2021)

「出かける母は 体に昆虫を巻き付ける

せみ とんぼ かまきり

錦に織られた虫を 私は幼い時から飼っている

母に隠れ 刺繍の裏糸を 指で弾いた土用干しの帯

放たれた虫達は 一時 夏の空を飛ぶ

祖母から叔母そして母へ 女の呼吸を薄い翅にたたみ

一本の黒い流れの中で 生き続ける虫達

少し派手になってきたね 鏡の中の母が笑う

背にとんぼ 胸元にかまきりを留まらせて

私も母へ繋がっていく」—黒い帯、青山かつ子

物心ついた頃には体中に黒子が広がっていた。子供の頃同級生から黒子の多さを揶揄われ、虫がひっついているようにと黒子をつねられた。元々黒子は平安初期に「ははくそ(母糞)」と呼ばれ、母親の胎内でついたカスだと考えられていた。語源の通り、もしも私の黒子が、皮膚にくっつく黒い虫達が、母から受け継いだものだったら。青山の「黒い帯」を始めとする詩は、周縁化された過去の女達の生を繋げる。そこから着想を得て、自分の皮膚を譜面、全身の黒子を音符と見做し、黒子を線で繋ぎ合わせたドロ잉スコアを直接体に刺青で彫り込んだ。まっさらな白い肌が美の基準であり、黒子やシミは美容外科で除去し美容液で薄めコンシーラーで隠すよう美容業界の広告が勧める。でも私は自分の黒子について語り、黒子で作曲し、黒子の楽譜を彫ることに決めた。黒子は肌に残る記憶であり、唯一無二で私の体の証だから。私も体のあちこちに虫を留まらせて、黒い流れの中に立ち、文学や音楽を通して先を生きた女達の抵抗と希求をもっと感じ、後に続きたい。

彫り師 | 江佳滢

## Camille Kiku Belair 《Book Piece》(2021)

本作は第一回米田恵子国際作曲コンクールのために創作された。任意の数の演奏者のためのインストラクション・スコアであり、演奏時間は問わない。演奏者はそれぞれ一枚の紙にグラフィック・スコアを制作し、それを折って8ページの小冊子にする。スコアは楽章であり、すべて同時に演奏される。各々のパフォーマーがすべてのスコアを演奏し終えるまで、演奏者のあいだで交換される。私の狙いはグラフィック・スコアと製本作業を、最終的な作品形式に意義深い影響を与える仕方、組み合わせることにある。それぞれのパフォーマーが作曲家となり、独自の視覚言語を創作し解釈するが、各自がそれに対しどのように反応するかをみるのは、とても興味深いことに思う。

## とき 桑原ゆう《落下する時間》(2022)

「縦」と「横」とは、互いに定義しあう関係にある。あるひとつの直線を指して「これは縦線だ」といつてみたところで、見るほうの角度を変えたら「横線」になってしまう。「横」が決まらなければ「縦」も決まらない。「横」に対しての「縦」であり、「縦」に対しての「横」である。「縦」を考えると、同時に「横」についても検討しなければならない。白川静『字訓』（平凡社）の「横」の項目に、「縦（立つ）に対して、『避（よ）く』の関係であるから、中心点の左右に外れてゆくことをいう。」とあるが、私の普段の作曲の手法はまさにこれである。音高においても、リズムにおいても、わざとずらすことにより生じた干渉や歪みが「横のつながり」となり、それを少しずつずらして重ねていくと音楽という「かたち」が成っていく。この「横の方法」に逆らうように、本作では「縦の方法」を試みようとした。音を積み上げて和音の柱で考え、音や音楽の自然な方向性を断ち切って継いでいく。「横の方法」を避けることにひたすら注力したつもりだが、それでも、潜在意識が「横」のバランスを求めようとするので、「横の方法」から完全に離れることはできなかった。タイトルは、「縦」の運動や律動を考えたときに自由落下運動を連想し、音の要素を決めるヒントになったことによる。

## 辻田絢菜《メタルチューブワーム》(2022)

今回の作品テーマである「横」と言う言葉を、「線」や「持続」という言葉と同様に捉えました。

冒頭は、うねうねと呼吸しながら蠢く生き物のような横線の音楽をイメージしています。しかし単に持続する音を一貫して続けることだけではなく、持続を表現する方法を自分らしい視点から探すことが本作の大きなポイントでした。試行錯誤し行き着いたのは、本来長く持続するはずの流れをリズムによって区切り推進力を得る方法です。私なりにこれを例えるなら、静止画を連続させることによって画が動いているように見せるアニメーションを、スローにしたり、巻き戻したりして楽しんだりすることと近いです。徐々に同音での連打や、それを受けてパーカッションに音を取り扱うセクションが登場します。

うねうねとした音の動きや激しい息使いを有機的とするならば、リズムや呼吸音をコントロールしてそれらを区切る事は有機的な生き物らしさを逸脱していく表現の様に感じます。そんなことをイメージしながら構成を考えました。

タイトルになっている「チューブワーム」は深海に生息する口や肛門などを持たないチューブ状の生き物です。人間のように食料を食べて排泄をして…というわかりやすい生命活動とは異なる方法で生きているこの不思議な生き物が、私の目指した音楽のイメージと重なり、またチューバと言う楽器の構造とも近いため今回のタイトルに選びました。

委嘱を下されたスタイル＆アイデア：作曲者の皆様、初演して頂く坂本光太さんにお礼申し上げます。

## Profile

### 灰街 令 Rei Haimachi

ハイマチレイ。静寂と騒音に焦点を当てて音から音楽への構造化や意味生成の過程について考えている。エリック・サティの「家具の音楽」を脱構築する「こわれた家具の音楽」シリーズの作曲を活動の主軸にしつつ、アメリカ実験音楽と戦後日本の現代音楽を主な対象に研究や執筆も行っている。国立音楽大学大学院博士後期課程に在学中。

### 山崎 燈里 Akari Yamasaki

1992年茨城県出身。台北在住。千葉大学教育学部卒業。ホクロまみれの翻訳者、執筆者。思い通りにならない不完全な自分の体を出発点に、女性性を取り巻く歴史と政治と呪術を探りエッセイを書く。「黒い帯」は作曲第1号。

### Camille Kiku Belair

Camille Kiku (菊) Belair は主にフィールド・レコーディングとミクスト・メディアの領域で活動するインターディシプリナリー・アーティスト、作曲家、クラシック・ギタリスト。

### 桑原 ゆう Yu KUWABARA

1984年生まれ。東京藝術大学および同大学大学院修了。日本の音と言葉を源流から探り、文化の古今と東西をつなぐことを軸に創作を展開。国立劇場、静岡音楽館AOI、神奈川県立音楽堂、横浜みなとみらいホール、箕面市立メイプルホール、ルツェルン音楽祭、ZeitRäume (パーゼル)、Transit 20-21 (ルーヴェン) 等、国内外で多くの委嘱を受け、世界各地の音楽祭や企画で作品が取り上げられている。楽譜は Edition Gravis より出版。「淡座」メンバー。国立音楽大学、洗足学園音楽大学非常勤講師。第31回芥川也寸志サントリー作曲賞受賞。https://3shimai.com/yu/

### 辻田 絢菜 Ayana Tsujita

東京藝術大学音楽学部作曲科を経て、同大学院修士課程作曲専攻修了。第83回日本音楽コンクール作曲部門入選、岩谷賞（聴衆賞）受賞。第25回芥川作曲賞ノミネート。'18年NHK委嘱作品「CollectionismXI/Sidhe」がNHK-FM「現代の音楽」にて放送初演。現在、昭和音楽大学非常勤講師。

https://linktr.ee/ayacom22

### 坂本 光太 Kota Sakamoto

チューバ奏者。前衛音楽、実験音楽の社会的な側面に惹かれながら、その演奏の可能性を追求している。今までの企画・演奏に、国家権力の思想弾圧を取り扱ったV. グロボカール作品の演奏会『Gewalt/Geräusch/Globokar』(2020)、想像上の芸術家に関するレクチャー・パフォーマンス『米田恵子(1912-1992)の作品と生涯について』(2018)など。博士(音楽)。京都女子大学助教。

### 八木 友花里 Yukari Yagi

打楽器奏者。ケルン音楽舞踊大学現代音楽科に在籍。ソリスト・室内楽奏者として、PerKumania、NOW!、モンハイム・トリエンナーレ、アハトブリュッケン、マレーシア・サウンドブリッジなどの音楽祭に出演。アンサンブル・ムジークファブリーク、アンサンブル・ルールなどに客演。Marimba One 社ディスカバリーアーティスト。打楽器奏者。ケルン音楽舞踊大学現代音楽科に在籍。ソリスト・室内楽奏者として、PerKumania、NOW!、モンハイム・トリエンナーレ、アハトブリュッケン、マレーシア・サウンドブリッジなどの音楽祭に出演。アンサンブル・ムジークファブリーク、アンサンブル・ルールなどに客演。Marimba One 社ディスカバリーアーティスト。

## 小島 広之 Hiroyuki Kojima

東京大学総合文化研究科超域文化科学専攻博士課程在籍。ドイツの音楽批評家パウル・ベッカーが第一次世界大戦後に提起した「新音楽」理念を中心に、同時代の前衛的作曲の根底にある音楽観、音楽美学を研究している。主な論文に「パウル・ベッカーの客観主義的な音楽美学」『音楽学』第 67 巻第 2 号。音楽批評家として現代音楽を主たる対象に論じている。第 9 回柴田南雄音楽評論賞奨励賞受賞。

## 西村 聡美 Satomi Nishimura

武蔵野音楽大学卒業。アートマネジメントを専攻。これまでの職歴に、トーキョーアーツアンドスペース本郷職員（学芸）、びわ湖ホール事業部職員など。他者の介入による予測不可能性や社会における芸術の在り方への関心を起点とし、劇場の中で行われる公演にとどまらず、教育普及活動、市民参加型プログラムの運営にも携わる。また、異分野との領域横断的な協働にも取り組む。これまで手がけた企画に「態度と呼応のためのプラクティス」シリーズなど。

## 原 壘 Rui Hara

京都大学大学院人間・環境学研究科博士課程修了。博士（人間・環境学）。専門は音楽学、表象文化論。とりわけ 20 世紀以降の領域横断的な芸術実践に関心を持つ。現在、京都芸術大学、早稲田大学非常勤講師、日本学術振興会特別研究員（PD・東京大学）。著書に『武満徹のピアノ音楽』（アルテスパブリッシング、2022）。

助成

公益財団法人 朝日新聞文化財団

日本音楽学会 支部横断企画

公益財団法人 野村財団 \*西村聡美に対して

